

平成 27 年度  
第 2 回酒田市総合教育会議  
議事録

## 平成 27 年度 第 2 回酒田市総合教育会議

1 日 時 平成 27 年 11 月 26 日 (木) 開会 : 15 時 00 分 閉会 : 16 時 30 分

2 場 所 酒田市役所中町庁舎 6 階 61 号会議室

3 出席者

(構成員) 酒田市長 丸山 至  
酒田市教育委員会  
教育長 村上 幸太郎  
委員 浅井 良  
委員 齋藤 義明  
委員 西村 薫  
委員 國眼 真理子

(事務局)	総務課長	菅原 司芝
	教育部長	大石 薫
	教育委員会管理課長	桐澤 聡
	教育委員会学区改編推進主幹	大沼 康浩
	教育委員会学校教育課長	今野 誠
	教育委員会指導主幹	齋藤 司
	教育委員会社会教育課長	清野 誠
	教育委員会図書館長	阿部 博
	教育委員会管理課課長補佐	長村 正弘
	教育委員会管理課管理係長	関口 誠

4 傍聴者 3 名 (一般傍聴者 1 名・報道関係者 2 名)

5 協議事項

- (1) 本市の教育を取り巻く諸課題について
- (2) その他

6 議事経過の概要

次のとおり

## 1 開会

(大石教育部長)

それでは、ただ今から平成 27 年度第 2 回酒田市総合教育会議を開会いたします。本日の会議の進行を務めさせていただきます、教育部長の大石です。どうぞよろしくお願いいたします。初めに丸山市長からごあいさつをお願いいたします。

## 2 あいさつ

(丸山市長)

それでは、教育委員の皆さま、久しぶりでございますという方々もいらっしゃるし、日頃お世話になっている方々ばかりですので、あいさつする分には少し、ほっとした気持ちでいるのですけれども、第 2 回酒田市総合教育会議に、お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。こういう会議の設定について、副市長時代の私は理解しておったのですが、市長としてこの場に立ってご挨拶するのは、初めてでありますので、そういった意味では少し緊張しております。9 月に市長になって、議会が 9 月末から 10 月にございました。その中で、新市長は、本間前市長のときに策定をした教育施策の大綱を引き継ぐのかという質問がありました。私は、そのまま引き継ぎますということを明快にご答弁させていただきましたし、教育委員会が今抱えております様々な課題、こういったものにつきましても、教育長、委員の皆さまと一緒に、教育委員会と一緒に議論をしながら、教育委員会の判断を尊重して、進めていきますという答弁をさせていただいたところでございます。そういった意味では、私はこの総合教育会議、非常に重要な会議の場だというように思っているところでございます。ご存知のとおり、いじめの問題ですとか、学力の関係ですとか、あるいは選挙権が 18 歳に引き下げられることですとか、教育に係る様々な課題が、市民の皆さまの関心が最も高いことなのではないかというような思いをしております。そういった中では、私は市長選挙に出たときに、やはり、産業振興ですとか、人口減少のいろいろな課題があるけれども、一番大事なのは、人を育てることですので、人が財産で、人財というものを大切にしていって、そういった市政を目指したいということで、市長をさせていただきました。そういった観点からも、まちづくりのためには、まずは、人財育成に手を抜かない、それは教育委員会と二人三脚で頑張っていくのだと、そういう決意で、市政に臨んでいるところでございますので、今後とも委員の皆さまからは、様々な、お知恵、あるいはご声援を賜りますようお願い申し上げたいと思っております。間もなく 28 年度事業の予算を組み立てする時期がやってまいります。今日この第 2 回総合教育会議の場で、いろいろなご意見をお伺いし、内部でしっかり受け止めて、次年度の事業や予算に反映できるものは、積極的に反映させていきたいと思っておりますので、どうぞ活発なご意見を賜りますようお願いいたします。ご挨拶にかえさせていただきます。本日はご参加いただきありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。

(大石教育部長)

それでは、続きまして村上教育長からごあいさつをお願いいたします。

(村上教育長)

それでは教育委員会を代表いたしまして、ごあいさつを申し上げます。今日は第2回目の総合教育会議でございますけれども、市長からもお話しいただきましたとおり、丸山市長との総合教育会議というのは、今回が初めてということになります。市長におかれましては非常に忙しい中、このような会議を招集していただきまして、本当にありがとうございます。ただ今市長のお話にもありましたとおり、市長が人財を育成する、人が輝くまちづくりを推進していきたいというように所信表明されておりますことを受けまして、教育委員会としても責任の大きさを改めて感じているというところでございます。市長が進めようとする、人は宝である、財産であるといったような考え方を受け、今後どのような展開を教育委員会としても担っていったらいいのかということにつきまして、こういった会議で十分に話し合いをしていきたいと思っております。教育大綱も真新しい時期でございますし、それから、後期の教育振興基本計画についても、スタートしたばかりでございます。こういった方針などを具体的にどのように実現していくのかということについてはこれからが本番ですので、市長部局と一緒にやっていかなければならないと思っております。酒田の教育で大事にしておりますこと、スローガン、テーマにもありますけれども命の教育でございます。まずは市長部局と防災、子どもの命を守る体制のあり方、福祉関係、様々連携して取り組まなければならないことがたくさんあります。そういった意味で、山積する課題もあるわけですが、一緒になって課題の解決を図っていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

### 3 協議

(大石教育部長)

それではこれより協議事項に入りますので、ここからは市長に座長をお願いします。発言の際には皆さま座ったままでお願いします。よろしくお願いいたします。

(丸山市長)

それでは、座長ということでございましたので、これから協議を進めてまいりたいと思います。私が座長をやりますと、自由に発言してくださいというものですから、いろいろな意見がどんどん出てくるのですが、決められた進行以外で皆さまの意見を聞くという場合が多々ありますが、遠慮なさらずにご発言をいただければと思います。その都度、その意見を踏まえて事務方には、これはどうだ、これはこうした方がいいのではないかと、ああした方がいいのではないかとどんどん投げかけていきますので、なかなか事務方の進行どおりには進まない場面が多々ありますが、気にする必要はございませんので、遠慮なくご発言いただきたいと思っております。それでは、協議事項の1番目、本市の教育を取り巻く諸課題についての、標準学力検査及び全国学力学習状況調査の結果を踏まえた学力向上対策について、事務局からご説明をお願いしたいと思います。

(学校教育課長)

本市の教育を取り巻く諸課題について、本市で小学校4年生から中学校3年生を対象に行っている標準学力検査、それから、国で小学校6年生と中学校3年生を対象に行っている全

国学力・学習状況調査の結果からご説明いたします。最初に、全国学力・学習状況調査の結果になります。今年度の全国学力・学習状況調査は小学校6年生を対象に、国語A、国語B、算数A、算数B、理科、中学校3年生を対象に、国語A、国語B、数学A、数学B、理科が行われ、本市の結果で全国の平均正答率を上回ったのは、小学校の国語A、理科、中学校の国語Aで、その他の教科が全国の平均正答率を下回りました。昨年全国平均を下回っていた中学校国語Aが今年度は全国平均を上回ったこと、また、資料にはありませんが中学校国語Bは全国平均との差が縮まっているなど、改善している教科もありますが、全国平均を下回る教科が複数あり、今後学力向上に関する取り組みをしっかりとしていかなければならないと考えております。次に、本市で継続して行っている標準学力検査は、小学校4年生から中学校1年生までは4教科、中学校2、3年生は5教科でございますが、本市の今年度の結果は、小学校4、5、6年生、中学校1年生までは全教科、中学校2年、3年では3教科で全国標準を上回りました。全国学力・学習状況調査の分布から上位層が少なく、子どもの力を伸ばし切れていないととらえております。今日の資料の2枚目の資料が、今年度の小学校6年生の学習状況調査で、3枚目が中学生3年生の学習状況調査結果です。小学校6年生と中学校3年生で共通する傾向があります。2枚目の小学校の学習状況調査結果をご覧ください。児童生徒自身に係る質問ですが、地域とのつながり、家庭生活に係る質問の読書への興味に関する質問事項については、全国平均を上回っています。この状況は、3枚目の資料の中学校3年生でも同様に読み取れます。一方、小学校6年生、中学校3年生とも家庭生活に係る質問のテレビやゲーム、それから携帯電話、スマホを長時間使用している児童生徒の割合が、全国平均を上回り、2時間以上家庭学習をしている児童生徒の割合が全国平均を下回っております。教育委員会としては、学校保健委員会を通して、テレビやゲーム、スマホから離れる時間を確保していくアウトメディアの取り組みを推進していくものです。また1枚目に戻っていただきまして、学力と深い関係のある読書についてですが、先ほど小学校6年生と中学校3年生の学習状況調査結果から読書への興味は全国平均を上回る状況であることに触れましたが、各学校での学校図書館の開館時間を工夫するなどの取り組みにより、小学校6年生、中学校3年生のみならず、全校児童生徒の一人あたりの貸出冊数が増えてきています。それから、児童生徒の学校生活、学習活動の充実や集団への不適応状態にある児童生徒への支援に当たるため、今年度は小学校19校、中学校7校に計40人の教育支援員を配置しております。教育支援員が教員と連携して、授業や行事等で障がいの特徴や個別のニーズに寄り添った支援を行うことで、児童生徒の生活、学習活動に対する意欲の向上に結び付けています。一方、学校には、命に係る危険への対応や1対1の支援を要する児童生徒が複数在籍しており、教育支援員配置への期待が大きくなっています。今後については、一番上の資料の右側になります(1)にある今年度導入したQ-Uをはじめ、(2)から(5)のこれまでの施策を継続していくとともに、(7)にある校長会と連携しながら、教職員の指導力向上への取り組みを進め、さらに12月に予定している酒田の子どもの学力向上推進会議で、具体的な施策について議論していきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

(丸山市長)

ありがとうございました。ざっと、資料を見ていただきました。資料は前もって配布されているので、目を通していただいているかと思っておりますけれども、ここからは、この件に関し

てということになります。ぜひ意見交換させていただきたいと思っております。委員の皆さま、遠慮なくご発言をいただければと思います。私と目があつた齋藤委員ございますか。

(齋藤委員)

発言させていただければと思います。学力がある程度低下しているという状況であると思われる。確かに今の説明の標準学力検査は、例年行っておりますが、全国平均以上はいつているということで、今まで本市で行ってきた施策がある程度成果として出てきているとの感じは受けます。他市との状況はあまり深くわかりませんが、感覚で言わせていただければ、本市の場合はある程度手厚く、教育に関しては、手を差し伸べていただいていると感じておりました。ただ、近年の流れを見ると、これは山形県もそうなのでしょうけれど、公学校という立場を考えれば、集団での指導体制というものをどのように形を維持しながら、児童生徒に対して、現場の教職員の方々が、目配りをしていくかということに大きく軸足を置いての施策が非常に大きいのかなという感じがしていました。当然本市も、県の意向を踏まえながら、それをやらざるを得ない部分もあるのですけれども、教育支援員なども配置していただく中で、集団での教育体制だけではなく、児童生徒個人への指導体制というものをこれからより手厚くしていかなければ、学力の問題、健全育成という問題もあるわけですが、なかなかうまくいかないのかなと感じておりました。当然、物的なもので解決できるようなものではないわけですから、そこには人的なもの、人的配置や質などの問題もあると思います。児童生徒に対してその個々に対する、対応の仕方というものを今一步踏み込んでいかなければ、根本的な解決はできないのかなと感じております。今の説明にありましたが、一つのクラスの中でも、集団生活になじめない子どもたちもいるわけであって、その子どもたちにも手を向けながら、また、集団での学級運営というものを考える上でも、極論過ぎるかもしれませんが、能力別なども最近全国的にもいわれ始めておりますが、能力別という言葉にちょっと語弊があるのかなと思うのですが、義務教育課程の中でも、習熟度別の教育というようなやり方もあってもいいのかなという思いはしています。各学校での取り組みなど、今までやってきている部分もあり、なかなか追いつかない部分もあるのでしょうけれども、その辺のところにももう少し力を入れられれば、より子どもたちも学校が楽しくなるだろうし、当然厳しさもある、覚えて貰わなくてはならない部分もあるのですけれども、その辺をもう少し何か施策として出していければ、もう1歩2歩どころでなく5歩も10歩も前進するような思いがします。そういう印象を受けました。

(丸山市長)

今の齋藤委員の意見に対して、何かご意見、事務局でも結構なのですけれども、どうでしょうか。もしご意見あればどうぞ。

(浅井委員)

直接、齋藤委員の発言に対してということではないのですが、市長から、一番大切なのは、人を育てることである、人財育成であるということでお話があつたのですけれども、9月議会の所信表明でも、酒田市の未来を担う人財を育成するためには、学力向上対策を強化していくのだと、それから教育支援の充実を図っていくのだということが明記されていまして、

大変我々にとってはありがたく、そして心強く思っております。今後ともよろしくお願いたします。本市の学力の現状についてですけれども、今日の資料の1番最初に書いてありますが、小学校中学校合わせて10の教科領域があるわけですよ。そのうち全国平均を上回ったのが、小学校の国語A、理科、それから中学校の国語Aと3教科領域しかないわけですよ。それが果たしていいか悪いかというのは別問題として、このことをシビアに我々は受け止めなければいけないのかなという思いでございました。今日の資料には載っていないのですが、今年8月に全国学テの結果が新聞等で公表されたときに、1番驚いたのは、山形県の平均正答率というのが、全国の平均正答率と比べると、年々ですね、2007年に始まったのですが、年々低下しているのですよね。県も低下しているのだけれども、おそらく酒田市も同じように低下傾向にあるのではないかということだと思っておりますけれども、私は、その低下傾向にあるということが、なかなかとどまらないことがすごく問題なのではという思いでいるところです。2007年に始まったわけですが、その頃はまだ、酒田市も県も全国平均よりはいい位置にいたのでは、いい点数を取っていたのではと思います。実際、私もその頃現場におりましたので、実感として酒田も県も頑張っているなというような、今このままの状態であれば、それほど学力向上対策などやらなくてもいいのではという思いがあったことが記憶にあります。ただそれが今となっては、どうなのか、もう少し手厚くやっておけばよかったなど少し反省もしているのですが。各学校においては、先生方も、そして子どもたちも非常に頑張っております。教育委員会も真剣に学力向上に取り組んでいると思っておりますけれども、なかなか年々低下していくという傾向に歯止めがかからないのは、なぜなのかなという思いです。齋藤委員からは、施策がある程度効いているのではというお言葉がありましたが、私は施策自体が果たして、有効なのかどうかといったようなことについて、これから考えていく必要があるのではと思っております。そういった点を何らかの場で検討していく必要もあるのではと、今まで酒田市や県がとってきた学力向上対策はこれでよかったのかといったようなことを検討してみてもいいのではという思いでいるところでございました。

(丸山市長)

ありがとうございました。私も、学力が落ちているということは、情緒的ではありませんけれども頭の中では、認識をしているのです。これ以上学力を上げるにはどうしたらいいかというのを常に考えてはいるのですけれども、専門家でもないので妙案は出てこないのですが、先ほど、齋藤委員から出ました個人的な指導体制を強化しないと、というお話がありまして、学校教育という集団での指導体制というのはたまに見かけるのですが、私は、学力向上対策でもっとも大切なのは、先生方の指導法の研究というのは必要だと思いますけれども、それ以上に、学力に対する親御さんの考え方ですね。学校では親に対して、教育活動はできない、PTAというのがありますけれども、なかなかそういう場というのはいないので、やはり親が意識改革をしないと、子どもだって、学力向上のために何かアクションを起こすというようにはならないのではと思っております。ほんとうは社会教育が大事なのだという思いをもっているものですから、市長選に出るときにも社会教育という言葉を意図的に使ったのですけれども、子どもの学力が悪いのは、その親世代の人たちの認識の甘さがそうさせているのではないかなという、そういう気持ちがあって、そこへの働きかけもセットでやらないと、学力というのはなかなか上がってこないのではないかなという思いをしております。

もう一つは、この学習状況調査ですけれども、本当に子どもたちの学力水準を精緻にあらわしたデータなのかというところを考えると、そうでもないのではないかと、傾向としてはわかるけれども、実際はそんなに、この地域の子どもたちの学力が劣っているということでは無いのではないかなと、この調査の仕方とか、細かく見てみれば、どこか穴があるのかもしれないし、このことをすべてととらえて、右往左往する必要もないのではないかなと。今までやってきたことを着実に継続することが必要と思っております。ただ、先ほど学校教育課長からも説明がありましたけれども、教育支援員の関係については、それから一対一の支援を要する子どもたちが複数いるということについては、これは現実的にそうだという認識も私はもっておりますので、必要なだけの教育支援員はきちんと配置をしたうえで、学力がどう伸びていくのかということを検証する必要があるのではないかなと思います。やはり、学科、教科を教える教員の負担が、我々の頭の中で考えている以上にかなり厳しい状況になっているとすると、そういったものを少し緩和するような、行政で少し手助けできるようなところ、そういうのは教育支援員等を充実させて、教科指導にもっと集中できるような学級の運営体制をきちんと取って上げるというのが必要なのではないかなという思いではあるのですが、そういった意味では今教育委員会で、Q-Uという先ほどもございましたけれども、深めあう学級集団づくりというようなことを、まず、それがないと、楽しく学校生活を送れる、そういう環境がないと、学力向上につながらないということから、一生懸命取り組んでいるということは、この成果も少し見てみたいと思っているところです。そういった意味では、今、お二人の委員から出された意見、私ももっともな意見だなと思って聞いておりましたし、ただ、習熟度別教育という話が、齋藤委員から出されました。この辺については私もそれはどうかというきちとした意見は持ってないので、ぜひ皆様方からそれはどうなのだろうとご意見いただきたいなと思っておったのですが、どうでしょうか。

#### (國眼委員)

習熟度別について、ちょっと私もあれなのですけれど、やはり家庭との連携が必要だということ、私も強く思います。つい一週間ほど前でしたか、日本経済新聞の教育欄のところに、小学校で、家庭学習をサポートするのは、ほとんどが母親であるというデータが出ておりました。さすがに中学校に出ると内容も深まるので、塾に行ったり、他の兄弟だったり、父親だったりといろんな方が出てくるのですが、小学校の時は圧倒的に母親だというデータが出ているわけですね。この学力テストでも、家庭学習を自宅に帰って平日1時間以上やっているのか、2時間以上やっているのかということをお聞きしているわけですが、こういう項目を入れたということは、家庭教育を1時間ないし2時間以上やるのが好ましいという考えのもとで入れていると思うのですが、その1時間ないし2時間に関わるのが、やはり家庭であるという事実ですね。今、市内の中学校に学生を学習ボランティアとして派遣して放課後学習ということで週に1回やっているところなのですけれども、初回に私も引率が2時間ほどでしたが、学習状況というのを見ていたのですが、中学校3年生で、国語、数学、英語この3教科が多いわけですが、拝見していて、今までここまでわからなくてよく、9年間我慢して育ててきたなという子どもが現にいるわけです。中学校の先生は、高校受験の時に、少なくとも県立高校の入試の第1問目の問題くらいは解けたという達成感を味わわせてやりたいということをおっしゃっていて、なんとかそういう力をつけてあげ

たいと学生が参加しているのですけれども、やはり、小学校の時、いかに学力の差をつけな  
いかということが非常に大事なのではと思います。こちらのデータだと小学校では全国平均  
を上回った、あるいは標準学力テストでも全国標準を上回っていると書いてあるのですが、  
そういった現実を目にすると、小学校の時に、まだあまり差が見えないかのように思える小  
学校の時に、いかにきちんと、基礎学力をつけておくか、そこに先ほどの教育支援員ですと  
か、そういう方たちもきちんと配置をしていく、そして、ご家庭での協力を求めていくとす  
れば、親御さんに、ここのところはこんな配慮をしていただきたい、ただ宿題として、「はい  
やってらっしゃい」ではなく、家庭と学校の連携という形で、どのように家庭教育を指導し  
ていただきたいのかといったようなことも、連携していく必要があるのではないかなと考  
えたところでは。その上で、教室の中だけで理解するというのはとっても難しいので、ご家庭  
でできないとしたならば、放課後学習だとか、何かを工夫していく必要があるだろうと思  
います。

(丸山市長)

全くおっしゃるとおりだなと思います。先生から今お話あったので…。すいません、私、  
公益大にいたものですから、國眼先生に大学に来ていただくときにいろいろお世話になっ  
たためつつい先生と言ってしまいます。浅井先生も一緒に仕事をしていましたので先生とい  
う言葉が出るのですけれども、ご了承ください。先日、酒田東高校の同窓会に出たのですが、出  
た方いらっしゃいますか。あの時に、酒田東高校の校長先生から市長によく聞いてもらいた  
いのですがという前置き付きでしゃべられたのが、中学3年生の学力が低いということ  
でした。それがそのまま高校に行くものですから、高校のレベルが低いということを言われま  
した。その時に、村上教育長の名前も出てきたのですけれども、酒田東高校で、中学校に行っ  
て学力向上のための授業をやっているのですか。

(村上教育長)

中学校の先生方を高校に呼んで、こういう授業をしていますという、酒田東高校の方針の  
ようなもの、取り組み方のようなものを広く理解してもらいたいという趣旨のものです。

(丸山市長)

本来は、中学校や小学校でそれぞれ考えるべき話のところを放置できないから、高等学校  
が中学校に乗り込んで、先生方にそういうことを伝えているということと言いたかったのだ  
ということでした。そういった現実を見て、市長としてどのように考えているのだというこ  
とを言いたかったのか、言いたくなかったのかよくわかりませんが、そういう言い方  
をされていたので、そういう意味では、中学校3年生の学力がことのほか、達成度が低いと  
いうか、想定よりも落ち込んでいるということを実態として重く受け止めなければいけない  
のではという思いで先生の話聞いておりました。そういう意味では、人間力も大切ですが  
けれども、同じくらいに学力も大切なことなので、それを高められる環境というものを、教育  
行政を担う我々が整備してあげたいと思っております。ところで、習熟度別、クラス分けし  
た教育指導というのは、やっているところはあるのでしょうか。高校などにはありますよね。  
公益大の時も、同じような状況がありまして、英語だったと思いますけれど、合格してきた

から一律の水準で教えようと思ったら、ことのほか差があって、クラス、レベルごとに分けてやっていかないと、という話をしておりましたので、そういうことはあるのだろうと思いますけれど、小学校、中学校の段階でそのようなものが入り入れられているのかということが私はちょっとわからないのですけれども。

(齋藤委員)

実際、なかなか公教育の場では難しい部分があるのではと思うのですが、今、國眼先生も言われましたけれども、小学校での取り組み方が、やはり中学校に反映するわけであって、これも私の経験での話になりますが、ある程度小学校で方向性を示して、それに答えてくれた子どもたちというのは、自分で努力するという方向性が見出せるのかなという体験をしたことがあるのです。ですから、今までおっしゃられたとおり保護者のご理解も当然必要だろうし、そういったことを働きかけていかなければ、いくら学校でがんばっても、子どもたちにそういう成功体験が無ければ、子どもたちも本気にならないだろうし、保護者も本気にならないだろうしということを考えます。ですから、そういったことをなんとかできればと考えます。地方では都市部と違って公立の学校が主ですから、都市部はある程度選択肢がある中で、各家庭環境の中で、「選ぶ」というような選択肢がいっぱいあるわけですから、それはいいのでしょうけれども、地方になればなるほど、教育ということに関しての選択肢は非常に狭まっていくわけですね。どうしても公教育の方向性、その辺が非常に大きいと思います。そういったことを、なんとか考えられればと思っております。

(丸山市長)

後ほどまた、教育長や学校教育課長からもお話いただきますけれども、西村委員から何かございますか。

(西村委員)

高等学校や大学で要求される学力というものが、全体的に高くなっている中で、地元の小中の学力はどうなのか。学力テストの結果を見れば、低下しているわけですから、やはり対策を打っていかねばいけないと思います。こちらの資料にもございましたが、対策は現状把握ですとか、今後やっていかねば、継続してやっていかねばいけない施策ですとか、新しい施策ですとか並べられておまして、やらねばいけないことを、具体的にどう実現させていけるのかということをしつくり考えて行かないと、並べるだけではなくて、先に進めないのではと思っております。総合的な教育、教育委員会だけではなく、子どもを取り巻く環境というのが、教育委員会だけでは任せられない状況にあります。スマホの出現ですとか、資料にもございますが、メディア対策というのは、家庭だけに任せている状況ですが、それも難しい問題ですので、学習時間の確保などをしてもらいたいです。その中で、各家庭もそれぞれなので、任せっぱなしではなく、土曜日授業ですとか、そういったものをおして、仕組みの方から入っていかねばならないと思います。先日、学校訪問で市内の小学校に行ったのですけれども、その学校が素晴らしい取り組みをしておられました。しかも学力も高いということをお聞きしました。取り組みについて具体的にいえば、PDCA、学校経営のプランニングが素晴らしいのですが、それに対して校長先生が弱点に自ら手を下

していく、その姿勢が学校全体、先生方にも広がっておりますし、地域力と相まって、両方でチェック機能が働いておりました。そちらを理想として、進めていくのもいい手ではないかなと思いました。また、土日はスポ少やPTAの事業、地域の行事がとて多いので、アウトメディアを進めていくとおっしゃっておりましたが、そのあたりから具体的に進めてもいいかと思えます。

(丸山市長)

はい、ありがとうございました。今お話を聞いていて、これは教育長と学校教育課長に聞かなければいけないのでしょうかけれど、確かに学校は学校経営という言葉がある以上、校長先生が全責任をもっているいろいろなやられるのでしょうか、校長先生の学校運営方針によって、学校の中身の質が左右されるとすると、そういった良い例があるのであれば、その良い学校経営の手法を他の学校に徹底すれば、おのずとうまくいくのではないかと単純に思ってしまうのですが、教育委員会全体としては、そういう動きにはなっていないのではと思います。関わっていない立場の人間からの発言なので、違っていれば、またご指摘いただければと思います。

(村上教育長)

今の件ですね、確かに、先日訪問した小学校は群を抜いて学力が高いです。それはなぜかという分析はとても大事だと思っているところです。先日、教育委員会の担当者レベルでもなぜ高いのか理由を検討しており、今継続しているところです。私は常々、例えば校長会などでもお話をさせていただくとき、何かに失敗して、反省会を開いて、ダメだった理由というのは、比較的簡単なのだと思うのですけれど、うまくいったときに、なぜうまくいったのかというのを慎重に分析して、それを活かすというのは、失敗の反省会よりは、もしかしたら大切かもしれないということを述べております。そういった意味でも、非常に学力の高い学校の事例を研究することは大事だと思っております。ところが、学力について、これとこれとこれをやれば絶対高くなるという因果関係を整理することは難しいと思います。ただ、相関関係はあると思います。つまり、薬のようにこれを飲めば学力が上がりますというのは難しいことなのです。早寝早起き、朝ごはんを食べれば、学力が上がりますというのは、相関関係はあるけど因果関係ではない。もともと学力の高い子どもたちは、早寝早起きであるとか、朝ごはんをちゃんと食べている子どもが多いという相関関係はあるかもしれませんが。そこで、今、西村委員がおっしゃったように、また市長からもありましたように、良い例を研究して、ここはやれそうだなというところを試してみるという価値は非常にあると思うのです。先日訪問した小学校の校長先生は自ら、ちょっと難しい問題をつくって、子どもたちに配付しています。廊下を通れば、それをとれるようになっていきます。挑戦させようとしているのです。挑戦させる学校です。ただし、それだから良いのだということは、科学的にはちょっと良くわかりません。ただ、例えば今のように、地域の保護者の意識はどうか、その地域の皆さんの子どもたちを支えようとする家庭環境はどうか、あるいは、たまたま今テストを受けた学年の学習歴、どういった担任の先生から育てられ、どこでどういう経験をし、どこで励まされて伸びているのかなど、非常に多くのファクターが絡んでいる可能性があります。この小学校でも、全学年がそうだとは言えないわけです。学年によって、様々

な成績のばらつきというのは発生します。そのため、この小学校全体の取り組みが因果関係で成り立つかどうかはまだよくわかりません。ただ、良いという現実には確かにあることですので、良いことなのかもしれないと思った時に前へ一歩踏み出すこと、これはとても重要であると思っています。こういった話が総合教育会議で出たとなると校長先生がびっくりするかもしれませんが、研究しなければならないと思っている事例です。

(丸山市長)

ありがとうございました。本当にいろいろなファクターがあるんですね。一概に単純には分析できないにしても、それが事実としてあるのだとすると、検証してみる必要があるわけですね。余談ですけども、建物が立派になったので学力が上がるなんていう検証をされると、これはこちらもたまったものじゃないなと思ったりもしますけれど、ひょっとしたらそういうこともあるのかもしれないですね。分析してみないとわからないですね。素晴らしい校舎で勉強しているということが、子どもたちの意欲につながって、勉強する気がおきる、なんてことになると、修繕じゃダメなのかなと悩んだりもしますけれども…。まあこれは余談ですが、そういった酒田でも良い例があるということであれば、もっともっと分析をして、真似ていけるものであれば真似て良いと思いますので、それは教育委員会として、分析していただければありがたいなと思っています。能力別はどうですか。

(村上教育長)

能力別のことについて、少し触れさせていただきますと、例えば算数の時間に「TT」といって、一つのクラスに2人の指導者が入ることができると思います。そうしますと、それが恒常的にできるという場合は、最初は一緒に学んでいって、それから、時々小テストがあったりするわけですが、その小テストのあたりから、ちょっと難しいなということがあれば、もう少しゆっくり進みたいなというコースと、どんどん先に進みたいなというコースに分けるかもしれません。先生2人で、その教室を半分にしたたり、空き教室があればその教室を活用したり、例えばですが、希望制にして手を上げてもらって、僕はこっちのコースに入りたい、私はこっちのコースに入りたいということで、指導する例というのはあるのではないのかなと思います。これは単元のまとめのあたり、あるいは学期のまとめのあたりで、そういったことがあるとは思いますが、ただ、そういったことは、やっとならざるを得ないことでありまして、常に習熟度別が可能かという人々の問題もあって、なかなか難しいというようなことがあります。私自身も学校にいたころ公益大の学生の方から、手伝ってもらってどんどん教室に入ってもらいました。最初は大変でした。その学生に教えないといけないことが実はたくさんありまして、そうすると、教授することはできないのですけれども、見てあげたりアドバイスしたりすることというのはできましたので、そこで少しコース分けに入ったりだとか、1時間の授業の中でも、残り10分のところでコースに分けてですとか。そういうように少し流動的に、しかも教科によって、というようなことは様々な試みであると思います。ただし、特に小学校、中学校もそうかもしれませんが、難しいのは、本人の意識が、「私は遅れているグループに入れさせられた」というような意識が、その子どもの学習意欲に負の作用をしないかどうか、これは十分に気をつけなければならないと思います。ただし、実際にやってみると、齋藤委員がおっしゃっていたようにできたという喜びがそれに勝る可能性は十分あり

ますので、それは子どもと相談しながら、ということはあるかと思えます。

(丸山市長)

思い出しました。私がPTA会長るとき、教育長が教頭先生でいらっしゃいました。ちょうど公益大で仕事をしていましたものから、そんな話をして、学生さんから来てもらって、お手伝いしていただきましたね。

(國眼委員)

ごめんなさい、よろしいですか。

(丸山市長)

はい、どうぞ。

(國眼委員)

学生というサポーターもいると思えますし、それから、先日訪問した小学校などを見ると、コミュニティとの連携がすごいなと思いました。このように地域で何かやっていただけるようなことというのでしょうか、あれだけ地域が小学校を盛りたてようという動きになっているので、若いいきいきとした高齢者の方もたくさんいらっしゃると思えます。是非お手伝い願えないかという形で、サポーターになっていただくことも一つなのかなと思ったりしました。思い付きですけど。

(丸山市長)

2、3日前に公益大の吉村学長から、近々相談したいことがあるといわれまして、さっきたぶん先生が言ったことの関連なのかもしれないですけども、公益大の学生を使って、塾のような、あるいは、先ほど教育長がおっしゃったような、先生方と一緒にTTの一助になるような、そういうものの制度化について相談をしたいような話でしたので、もしそういったお話が具体的に詰められるのであれば、酒田市の教育委員会としては、せっかく公益大という高等教育機関があるわけですから、それを学力向上に活かすということは、十分あっていい対応かなと思います。学長と話をした結果を踏まえて、また教育委員会に相談させていただきたいなと思います。

(國眼委員)

実は、庄内町と三川町がうちの大学に働きかけてきていて、アルバイト料を出すので来ないかという感じで引き抜かれてしまいます。こちらは学習ボランティアとしてやっているものから、立場が苦しいというか、近いのでやってみたいという方には声をかけているんですけど、近隣の市町村も学力向上ということで、相当力を入れて集めているのだなという感じはしております。別にアルバイト料の話をしている訳ではないのですが、それだけ皆さま方の意識があるのだなと思いました。

(丸山市長)

そういえば、先ほど西村委員から土曜日授業のお話が出ましたけれども、教育長その点はいかがでしょう。浅井委員でも結構ですし。

(村上教育長)

そうですね、全国の中では土曜日授業をやっている自治体があります。土曜日授業の目的は、実際の例を見てみますと、学力向上を第一の看板に掲げているところもありますけれども、広い意味では学力向上とはいいながら、必ずしも勉強ばかりするのではない土曜日授業の取り組みも注目されているところです。それで、どちらかといえば、点数ががちりリンクするような土曜日授業よりも、土曜日たっぷりと連続した長い時間を使って、子どもたちによい体験学習ができないかといったような取り組み、いわば総合的な学習のもう少し体験版みたいなことなのですが、そういった体験をさせることによって、子どもたちの力を伸ばしたいといったような取り組みもあります。土曜日授業全般について申し上げますと、やれない理由はいくらでも上げることはできるのですが、一番ネックになっているのが教員の勤務体系でございまして、週あたりの勤務時間が制約されている中で、そういった人的な措置がとれないことが非常に苦勞するところではないかなと。一定時間休みを取る、とらなきゃならないということになりますと、土曜日に何かするために、何か別のところに穴があいたり、あるいは代替の人員を確保したりだとか、そういったことを全くしないでやるということは非常に難しい状況です。人的な支援を県や市などがどのように考えていくのかというようなことがあると思います。同じような発想として、例えば、子どもたちが学校にいない時間、例えば、放課後子ども教室であるとか、あるいは学童保育であるとか、ああいったような団体で、何か子どもたちの勉強にお手伝いできないかというようにして、施策を講じている自治体は確かにたくさんございますし、ちょっと学校とは違ったカラーの良い勉強ができているという事例も上がってきておりますので、そこは、土曜日授業も一緒なのですけれども、なんと申しますか、子どもたちが伸びるために良い体験、時間、あるいは勉強でもいいです。挑戦していくとか、わからなかったことをしっかりもう一回教えてもらうというものももちろん良いと思います。そこは、社会全体が考えていかないと学校の人員のキャパだけで、いろんなところに出張して歩くというのがもう限界状態だということは逆に言えるのかなと思います。

(西村委員)

子どもを一人にさせないという意味では、放課後の授業もいいかと思えますし、メディアに走らないことも一つかなと思いますので、是非そこを検討いただければと思います。一人ぼっちになるので、つまらないからゲームに走ってしまう。それが興味のある子であれば、絵を描くだとかいろいろあると思うのですが、そういったものが無い子を救うために支援をする施策もよろしいのかと思います。

(丸山市長)

教育委員会とは別に「英語で遊ぼう」という授業などもやらせていただいているわけですが、全部土曜日にやっているわけですね。まあそれは希望者制なのですから。10月の末

で、酒田市の地方版総合戦略を策定しておりますが、そのメニューの中に教育というものを盛り込もうということで、最初から教育が大事だと。要するに、人が人口減少を抑制する手立てとして、具体的な戦略として教育施策を充実させることということも、これは強力な武器になるのだという前提で、学力向上対策だとか、教育支援の充実とか、それから、英語教育の充実というのを特に項目として掲げて設定しているわけです。今、英語について、国際舞台で活躍できる人間を育てるということで、立川でしたか、小中高一貫教育をやっていて、一年は海外に留学させるというような、そんな時代になってきている中で、やはりこの地域においても英語教育、幼児期からの英語教育、中学校における英語検定3級合格者数を増やす支援をするというような、そんなことを盛り込んでいるものですから、今、通常の月曜日から金曜日のカリキュラムの中で、なかなか難しいとすると、土曜日に、教育委員会ではない別の土俵で、英語教育の力をつける授業展開をしてということとは、今お話しを聞いていて、そういうのは酒田の個性としてやってもいいのだろうなという思いをもったのですが、指導者を雇い入れることですか、お金がかかる話だなという思いをちょっと持ちながら、しかし、先ほど言いましたように人を育てる、人がその地域の財産だということからすると、お金の問題じゃないという思いを持っております。そこはまた、市の行政全体の中で、議論していきたいと思っております。学力向上対策の中で、ひとしきり議論が盛り上がったところでしたけれども、もっと何かございますか。あればこの機会にぜひ。

#### (國眼委員)

やはりこの学力向上の中の家庭生活に係る質問のところ、テレビ、DVD平日2時間以上、テレビゲーム平日2時間以上というのは全国よりも多いところですよ。小学生だと中学生以上にテレビ3時間とちょっと多いわけですが、このゲーム、特にスマートフォンですね。このスマートフォンにほとんどのゲームが入ってしまっているので、ゲームに関しては、テレビゲームよりは、手軽なスマートフォンのゲームが多いのだろうと思いますけれども、先ほど西村委員がおっしゃったように、ゲームをどのように使うかというのは建前的には学校にはもって来ていけないことになっておりますので、家庭に一任しているわけですよ。家庭でしっかり面倒を見てくださということになっているのですけれども、家庭の方も、一任されたからといって、どのように子どもに促したらいいのだろう、親自身、スマートフォンの使い方は子どもよりうまくないだろうと、私自身の体験で思っているわけです。パソコン、スマートフォン、情報機器の使い方は素晴らしく早いですよね、習得するのは。そのように家庭に委ねているにも関わらず家庭ではそれを指導する力というのはどれくらいもっているのだろうと思うと、やや心もとない感じがいたします。小学校、中学校を訪ねて、PTAの方や学校の先生方とお話しをすると、こういった内容の研修会や講習会をやるのですが、実際には来ていただきたい保護者の方からは来ていただけなくて、結果的にPTAの役員の方ばかりが聞くことになるのですというお話がこちらでもこちらでも聞かえてくるのです。そういうすれ違い、必要性というのが、こういう教育の立場で仕事をしている人間にとっては、みんな必要性を感じながら、家庭でうまくそれが機能していないといったケースがあるものから、こういった点をなんとかしないと、子どもたちのこの1日2時間以上使っているというこの生活って、すごく難しいですよ。1日24時間で、小学生だったら9時間以上は寝なくちゃならないわけですよ。残り8時間くらい学校でしょう。

そうすると、お風呂や食事の時間を除いて、スマートフォン2時間以上使ったらもう家庭学習の時間なんて無いですし、本を楽しむ時間、あるいは団らんを楽しむ時間も無いですね。そういったことを考えると、やはり企業との連携も非常に必要ではないかと思うのですね。前に、これはテレビで見たのですが、企業で食事の昼時に、出前講座で市の健康課の方だったか、健康指導あるいは栄養指導ということで、30分くらいやっていらっしゃったのを拝見したのですけれども、そのようにわざわざ出てくることはできなくとも、ある程度の数の職員の方がいらっしゃる企業に向けて、まずは、出前プログラムという形で「一緒に考えよう子どものスマホの使い方」のような、そんな講座があっても、社会教育の方のことだろうと思いますけど、あってもいいのかなということを思ったところでした。

(丸山市長)

そうですね、今のお話は確かに学校のPTA、保健委員会などをやっても意識の高い親御さんやPTAの役員は来るのですが、大体そういった親御さんの子どもさんは問題ないのですが、来ない人のところが問題なので、どうやって来させるかといっても大人を無理に引きずり出すわけにもいかないですから、そういう意味では、先生のおっしゃった、企業に向いて出前講座でそういう意識付けをしていくというのは非常に大切かなと思います。社会教育として企業にどんどん出向いて行くと、そういったところから土壌を変えていくというのは必要なことかもしれませんので、そこは教育長と少し相談をさせていただきたいと思います。以前、私も健康福祉部門にいた時には、保健師さんと一緒に、特に自殺予防などそういったものでは企業に乗り込んで、出前講座、出前教育的なことはやっておりました。広く言えばそれも社会教育なのですけれど、それだって、全員集めてというのはなかなか無理で、意識の高い人しか来ない場面が大多数なのでしょうけれど、企業の事業主の方にご協力いただいて皆さん集まる場でそういったことをやらせていただくというのは、これからやっぱり必要かもしれないですね。やはり親の意識を変えていかないと、あるいはこれから親になる人の意識を変えていくということが必要な気がしましたので、是非今のご意見については、内部できちんと議論をして、そういった対応がとれるような、そういう事業なども組み込めるように社会教育課に頑張っていただきたいと思います。その他何かありますか。

(浅井委員)

教育支援員のことですけれども、先ほど、市長から必要な数をそろえるというような力強いお言葉があって、大変うれしく思ったのですが、今年度の40名が学校の要望に対しては56%にすぎないというお話がありました。ということは、学校では倍に近い数の教育支援員を要望しているのかなと思うのですが、なかなかそれも厳しいのではと思います。それで一つ考えたのが、今年、社会教育課の事業で「夏休み宿題お手伝い教室講座」というのがありました。退職公務員連盟と協賛して実施したのですが、その反省などお聞きしてみまして、子どもたちにとっても、それから指導者、学校の教員たちにとっても、大変良かった、有意義だったという意見がたくさん出たというお話をお聞きしました。近年教員を辞めた方々、学校でもし自分の力が出せるのであれば、お手伝いをしたいという方々がいっぱいいるのですね。そういった方々をもっともっと学校で活かすことができないのかということを考えます。昔の先生方と話していると、学校で呼んでくれればいくらでも授業に出ても良い

のだけれどというような、むしろ学校からの誘いかけを自分たちは待っているというような、そんな方が結構おりました。そういった方々をもっと活用していかないといけないのかなと考えました。今、教育支援員がいるのだけれども、自分たちは無償で、ボランティアでもって教育支援員のようなことをやってもいいよという方がいっぱい集まるような気がします。実際にそういった仕組みが出来るのであれば、その役割を自分たちでもやってもいいよというようなお話があるのですよね。ですから、教育支援員の増員とは別問題として、新たに昔の先生方を活用するようなこともぜひ考えてほしいなど、それが一つの地域の活性化にもつながっていくと思いますので是非検討をお願いしたいです。

(丸山市長)

教育支援員の話については、私の公約ですので、実際70人くらいでしたね。教育委員会からの要望は。これはやるといった以上やらないとうそつきになってしまうので、来年度に向けて、それは充実させたいなという意気込みで、今財政課に指示はしております。あとは教育委員会と財政課でやり取りを管理課長、教育部長もいますけど、何と言っても教育部長は財政課のOBですから、そこはしっかりやってくれると思いますけれども、この点は約束したことでもあり、なんとか実現していきたいなと思いますし、今のお話のボランティアでやる方もいらっしゃる、自分の生きがいとしてそういうことに情熱をもっている方もいらっしゃるとは思っておりますので、その方々から協力いただける、そういう場があるのか少し考えてみたいなと思っております。先ほどの、地方創生の総合戦略で、移住定住の促進という項目があって、日本版CCRC構想の検討というのがあります。これはどういうことかというところ、CCRCというのは、コンティニューイングケアリタイヤメントコミュニティといって、第一線を退職した方で、ちょっと裕福な方々が地方にやってきて、将来のケアをそこで受けるのですけれども、地域のために活動できる、そういう方々が都会にも結構いるはずですので、こちらに呼んできて、定住人口を増やそうということですが、例えば今おっしゃられた教員の皆さんで退職された方、自分のノウハウをもって、地域のために復帰したい、貢献したいという意識の高い人にこちらに移り住んでもらう、もちろん、そこに住んでいる人であれば、それはそれで良いのですが、そういった方々に活躍の場を提供し、地域の子どもの学力あるいは人間力を高めるために貢献いただくという、そういった移住定住政策の推進というのもあって良いのではと思っています。今、浅井先生からいただいた提言についても、どういう形が良いのか少し考えさせていただきたいと思っております。その他、よろしいでしょうか。それでは、学力の関係については、活発なご意見をいただきましたので、それを踏まえて、12月に学力向上推進会議がもう一度開かれるということでしたので、こういった意見を踏まえてご議論いただいて、新年度どういう具体的な策として実施していけば良いのか、教育委員会の中でご検討いただきたいと思いますと思っております。進行上は、教育長の意見、私の意見ということになっているのですが、十分意見は言わせていただきましたので、割愛させていただきますが、その他ということではよろしいですか、教育部長。

(大石教育部長)

その他ですが、少し時間に余裕がありますので、今回の件でもフリーでも結構ですので、お願いいたします。

(丸山市長)

西村委員が今回で退任されるということですので、言い足りないこともたくさんあるかと思えます。その他の部分でも結構ですので、フリーにご議論いただければと思います。私からも一つお願いしたいことがありますので、皆さま終わってからで結構ですが、まずは皆さまの時間を第一に考えたいと思っておりますので何かございましたらどうぞ。

(西村委員)

すいません。数学と算数の成績がかんばしくないということなのですけれども、数学に対して、役に立つと思うかという、将来役立つと思うかというアンケートを取れば、本当に大学や職業に結び付かないのであれば興味はわかないと思うのですが、やはり、小学校の、先ほど國眼委員のお話にもありましたけれども、土台の小学校で、解く喜びなどを教えることによって、それが何に使われるのかではなくて、解くのが楽しいというような喜びをまず植え付けていく。そのためには、やはり落ちこぼれないように、わからなくならないように、手厚く教えていただく、そういったことが、数学に関しては必要なかなと思いました。

(村上教育長)

その有用感というのでしょうか、やって役に立つのだなというようなことというのは、教科を好きになることの中でも特に大事な意識かなと思います。ほんとにやって良かったと思うことじゃないのかなと思います。そうしますと、例えば算数では繰り返しのドリルのようなものをいかに正確に、いかに多く解けるかというような、そういった勉強に、勉強の比重がいくことが、実際問題としてどうなのか。こういう場面で何が使えるだろうねということを考えるような授業、現実的な生活場面の中で迫られるような授業、というのを比べるとこれは、バランスなのですけれども、やはり、教える側にとってはドリルをやるというのがすごくやりやすい授業なのだと私は思います。意図的に現実的な場面で考えるということは必要なことだと思います。ただし、そういった授業をやってないわけではなくて、例えば、教科書を見ていただくと大体納得いただけるのですが、ほとんど現実的な場面から入ってきます。こういうのは、どうしたらいいでしょうねというのは、生活の中から、例えば掛け算でもそんなのですけれども、並んでいるのを早く、一つひとつ数えなくても一瞬にして全体がいくつあるかをわかる方法はないかですとか、そういったことは小学校2年生でも現実から入るのですね。ところが、ずっと授業をやっていきますと、だんだんニンガシ、ニサンガロクの世界になりやすい、というところはあると思います。先日、教育委員会のスタッフ会議で私がスタッフの皆さんに配付したのは山形県教委が作った問題例ですけれども、白熱電球と蛍光灯どちらを買うかという問題でした。白熱電球は購入金額が安いだけけれど電気料金が高い、蛍光灯は購入金額が高いけれども電気料金が安い、何年使うとして、寿命は何年で、どう買いますかというのは非常に現実的な問題です。これは、中学校2年生で1次関数の問題だったのです。そうすると、あ、これはほんとにどっちを買うか考えるよねという話になるわけです。ですから学校としても、特に最初のあたり、それから応用問題のあたりでも現実の中で考えられるような時間というのは大切にしていかなければならないと考えていかなければならない。比重の問題としてはもう少し現実的な問題を濃く扱っていく。それが必要であると思っています。

(丸山市長)

そういう思考回路を検討しているというのは必要ですよ。算数も決して無用なことをやっているのではないと認識してもらおうというのは大切なかなと思います。それでは、私の方から少し。実は私も市長になっていろいろな団体の方々と意見交換をする時間がありました。体育協会と話をしていると、今、文化とスポーツの部門って市長部局にありますよね。ですが、この教育振興基本計画もそうですが、基本的には文化もスポーツも教育振興基本計画の中で、位置付けをしつつ、法律に基づいて、条例で市長が管理執行するという定めをしているものですから、何年前からでしょうか、教育委員会から分離をして、市長部局の市民部、文化スポーツ振興課に文化とスポーツの部門があります。それで、体育協会の会長、教員出身ということもありますけれども、やはり子どもたちの競技力だとか、そういったものを念頭に置いて考えたときに、文化も、スポーツも、教育委員会でやった方がいいのではないかなという意見をおっしゃるわけです。私も若い時に社会教育課におりましたので、それもそうかなと考えました。その頃は体育課というのが教育委員会にありまして、社会教育のなかでやっていたわけです。どっちにあってもいいのですが、スポーツの場合は中体連、高体連が絡むものですから、教育委員会にあった方が、一緒に足並みをそろえていろいろな活動ができるという話をされておりました。文化は文化で、伝統芸能を残すということからも地域との関わりや地域の学校との関わりも出てきますし、それは社会教育という関わりの中では、そちらの責任の方が良いのかなという思いがあります。差し支えなければ、委員の皆さまのご意見もお聞かせいただきたいと思います。私独断の判断で、教育委員会に部局を移すのは簡単なのですが、そんな話でもないでしょうから、そこはちょっと皆さまのご意見もいただきたいと思います。スポーツも、文化も、非常に地域づくりという中では大きなファクターです。にぎわいをつくるとか、交流をするなど、そういった意味では教育委員会も連携し全体でやらないといけない話ですけども、その点はどうかという思いもありますので、ご意見をお聞かせいただければと思っております。ご存知かと思いますが、今回村上教育長から団長になっていただき、アメリカのオハイオ州デラウェアに行っていました。「はばたき」という教育委員会の事業がきっかけとなって、町同士の交流にまで発展するという環境を整えていただきました。そうすると、やはり教育だとかなんとかというより、地域づくりという全体の抜本的な目線で考えた時、分けるのもいいのですが、こういった一つのまとまった計画があってその中に位置付けされているのですから、教育委員会という組織の中にあつた方が良くと思います。昔と違って教育委員会だから市長は関わりをもたないという事ではなくて、このように私も積極的に関わられるわけです。ただ、先ほども言いましたように、まずは子どもたちだとか、人財の育成を地域づくりの柱に据えるということからするとそのプロ集団である教育委員会の方が、いろいろな施策はやりやすいかなというように思い、教育委員の皆さまからもご意見をいただければなと思ったところです。

(浅井委員)

学校の立場から考えると、今は市長部局に行ってしまったので慣れてしまったかと思うのですが、スポーツ関係はずっと教育委員会だったわけですよ。それが急に市長部局に行つたものですからやはりやりにくかったです。教育委員会に行けばすべてことは進むと思ってたことが急に市長部局に行ってしまったものだから、何かすごくやりづらくて、学校とし

ては戸惑う場面もいっぱいあったのではという気がします。ただ、あれから3年から4年たっておりますので、スムーズに運営されていると思うのですけれども、戻してもらった方が、学校のいろんな運営の仕方や、子どもたちのいろんなスポーツ関係、文化関係のいろいろな施策を相談するということを考えても、教育委員会にあった方が学校としてはやりやすいのではと思います。学校の立場だけですけれども。

(丸山市長)

追い風になるようなご意見をいただいて、ありがとうございます。

(浅井委員)

ただ、教育委員会は数が足りなくてね。

(丸山市長)

今の段階では教育長、教育部長が大変になるのかもしれませんが。そこは大丈夫ですよね。他にどうでしょうか。もし、ご意見があれば。この点については、また教育長と少しやり取りをさせていたきながら。まあそんな話も出てきているのでお話をしました。

(村上教育長)

機構改革の件に関連して教えていただきたい部分は、教育委員会にあったときには、切り離そうとした意図があったのかと思います。そして、今は教育委員会の方でどうかと話題になっている。そうすると、そこに何が期待されているのか、今日で全部という話ではないのですが、何が期待されているのか、あるいは向こうでやっていた、切り離されていた時代の良かったこと、さらに期待したいことがあるので今度はこうだというような課題のようなものがあれば。今、体育協会の話も課題の一つということではあるのでしょうか、市長自身はどのように考えられていますか。

(丸山市長)

先ほども言いましたように私は社会教育にいた人間ですので、市職員の中で社会教育主事の資格を取ったのは私が最初かもしれません。社会体育というものを徹底的に教え込まれたのです。資格を取りに行くときに。その時、競技力、スポーツ少年団も大切なのですけれども、やはり究極は、子どもたちの育成からスタートしている。それから、スポーツは競技力だけ問われがちですけれど、本来は、生活にいちばん身近なものとしてスポーツを受け入れるべきものです。つまり、子どもの頃から生活の中に一緒に、学校の授業と同じようになじんでいくものなのだ。スポーツというものは大人になっても身近な存在になって、構える必要はなく、すんなり取り組める、生活の一部として取り組める、イギリスあたりではそれがスポーツだという話なのですけれど、そういった話がありまして、なるほどなど。そうすると、やはり市長部局にあると、イベントだとか、人を集めるということに主眼が行きがちですが、教育委員会にあれば、子どもたちの身近なものとして、教育活動の一環としていろいろなサービスを提供できるのではないかと思います。それが本来のスポーツであって、大人になるにつれ、競技で一旗あげたいという人はそれを土台にしてのめりこめばいいので

あって、そういう意味では、私も個人的には教育委員会にあって、文化もそうなのですけれど、小さなころからスポーツというものが身近なものとして受け入れられる環境を整備した方が大人になったときにスポーツを生活の一部として取り込めやすい。そういったものとして受け入れられるのではという思いがあるものですから、やりたいなと思っております。教育部長は、市長部局に移したときのいきさつなどはわかりますか。私はよく覚えていないのですけれど。

(大石教育部長)

やはり、市長側に狙いがあって、もともと本来は教育委員会の事務なので、条例を設置したうえで、もっていつているので、一つの大きな狙いはあったと思います。それはきちんと検証しなければと思います。

(桐澤課長)

その当時、少し聞いた話として申しあげますが、今市長がお話したとおり、まちづくりというところに軸足を置いた展開ができないだろうかというようなところから、市長部局に移行して、例えば観光との連携であるとか、そういったことを目指していきたいという狙いがあったように思います。

(丸山市長)

例えばシティハーフマラソンを始めましたが、教育委員会にスポーツの部局があったときにああいうものはたぶん出てこないですね。シティハーフマラソンで全国から多くの人を呼び込んで、まちおこしや観光振興に役立たせようという発想は、教育委員会にあってはやりづらいというか、そういうことがあったと思います。私は基本的にまちおこしや交流人口を増やすというような仕掛けは、また別のセクションで、それを専門に考えるセクションを置いてですね、スポーツそのものはまず子どもたちの体力向上というように、そこからスタートというそういった思いがあるので、そこはまた皆さんと議論させていただきたいと思います。私もその当時そういうイベント関係が理由だったのではないかなと思うのですよね。市長部局のほうが、予算もつきやすいし。内部の話ですが、なかなか教育委員会って、予算を取るのが下手ではないのですけれど、虐げられてきたという言葉の方がしっくりくるのですけれど、そういう状況だったのではないかなと。そのため、より予算が確保しやすい市長部局にという、そういう思惑もあったのではないかなと内心は思います。議会で言いましたけれど、私は総合教育会議を非常に重視しますと。教育委員会がやっている人づくり、そういうものに重きを置いて執行しますということを議会にもきちっと宣言をさせていただいておりますし、そういう意味では、どちらの部局にあるので予算が取りやすいとか取りにくいということではなく、そこは人財である子どもたちへの教育というものに力を入れていきたいので、おのずとそちらに予算もつけられるということからすると、教育委員会という存在が予算を取るうえで、不利益を被るような部署ではないと思っております。特に問題はないかなと私は思っております。ありがとうございました。1時間ほどいろいろ議論させていただき、もっともって課題もあるのでしょうけれども、大石部長にお返ししてよろしいでしょうか。このあたりでいったん区切りたいと思います。

#### 4 閉会

(大石教育部長)

短い時間の中で有意義な意見交換がなされたことと思います。私からは、次回の会議日程になりますが、これにつきましては、具体的な開催時間、内容等につきましては、改めて市長と相談の上事務局から皆さまにご連絡いたしますので、よろしく願いをいたします。それではこれもちまして、平成 27 年度第 2 回酒田市総合教育会議を閉会といたします。今日はありがとうございました。

(丸山市長)

皆さまありがとうございました。